老いの足音

老いの足音

「おはようございまあす！」
　ドアを開けると、明るい声が迎えてくれる。ホールの壁際に活けられた楓の紅い葉に陽が踊っていた。８人掛けのテーブルが８卓程並んでいる部屋に入る。先に座っている人に挨拶をして、私は自分の名前が書かれたプレートの席を目指した。
　ここは高齢者向けのリハビリテーションセンターだ。交通事故の後遺症で杖を必要とするようになった私は、１年余り前から通い始めた。
　まず、おしぼりとお茶が笑顔のスタッフによって運ばれてくる。体温、血圧チェックをしながら話しかけてくるどのスタッフも、信じられないくらい親切で優しい。そうこうするうちに、次々と送迎の車で利用者がやって来る。そんな中で、私だけ歩いて通って来る。自宅が、車でぐるっと回るより余程近い所にあるし、歩くこと自体がリハビリだと我儘をきいてもらった。
「おはようございます」
「良いお天気ですね」
　にぎやかな声がドアの向こうからした。聞き覚えのあるその声の主に、私は、手を振った。彼女は随分以前からの友人で、股関節の手術をした後、わざわざここを選んで通って来たのだ。
ずっとメールや手紙を出してつまらないことを言い合う友人である。
「まるで追っかけやね」
　そんなことを言いながら、私たちはこの時間を心待ちにしている。気の置けない友人がいるのは何よりうれしい。

　１０時になると朝の体操が始まる。縮まった筋肉をほぐすと、なんだか気持ちもほぐれていく。その後、トレーニングマシーンや色々な器具を使っての運動、ベッドでの体操やマッサージなど、其々の人に合わせたプログラムでのリハビリが始まる。皆さん、痛いところや麻痺したところをかばいながらも真剣に、でもなごやかに励んでいる。その上、お料理や陶芸教室、足湯まである。私も、最初は不安だったが、療法士さんのアドバイスのお陰で随分筋力が戻ってきた。
　エアロバイクを漕ぎながら窓際を見ると、ソファーでうとうとしている方がいる。温熱治療をしてもらって気持ちよさそうだ。そういえば通い始めた頃、その方に突然言われた。
「あんた、何歳？」
「いやー、恥ずかしいじゃないですか」
「こんなとこで何が恥ずかしいの？みんな年寄りばっかやのに」
「６７才です」
　しかたなく私が答えると、
「うわ！若いねえ、娘と同い年や」
　周りに聞こえる声を上げられ、真っ赤になった。親世代も多いここで私は、「若い人」のようだ。

　次々に体を動かしているとあっという間に１時間が過ぎて休憩になる。
「私の勝ちや！」
　ソファーの方から大きな笑い声が響いてくる。どうやらご主人を亡くした時の年齢の話しのようだ。
「私は４０代やったから子供育てるのん苦労したで」
「そらえらいことやったわなあ。うちは７５で逝ったで」
「いやええなあ、うちはまだおるんや、もううっとおしいてかなわん」

話は盛り上がって、賑やかなことこの上ない。結局、７５歳でご主人を見送った方が一番勝ちと落ち着いたようだった。
「あちらのテーブルの男性陣に聞こえるのになあ。女の人はたくましいなあ。それにしても、夫は今７１歳、果たして私は勝てるのかな？」
　などと思いながら、私はにんまりしながらお茶を飲んだ。ちょうどその時、向こうのテーブルで雑誌を読んでいた方が顔を上げ、お互いにニコッと軽く頭を下げた。いつも背筋が伸びてパワフルな方だ。
「９０歳までもう少しよ」
　そう言って笑うのだけれど、白髪パーマも素敵な上おしゃれ上手なので、とてもそうは見えない。満州で迎えた終戦のことを一度聴いたことがある。たまたまふたりだけの時、つい話し込んだのだ。私は、知らない満州の風や空、家の様子、吐く息が凍る寒さなどの話に、ただ物珍しく相づちを打ちながら耳を傾けていた。女学校を出たばかりで、父親は現地召集で戦死し、お母さん、妹２人と弟の５人で引き揚げたそうだ。その途中、小屋の裏の暗がりで、母親が幼かった弟の首を絞めたのだと言った。それを聞いた時、私の周りの音と色が消えた。どんな顔をしていたのだろう。何も言えず、あんぐり口を開けていたのか目を見開いていたのだろうか。そんな私を見て
「こんなこと誰にも言ったことないのに、私一体どうしてしまったんだろう」
　そうつぶやいて黙ってしまった。しばらくして、大きなため息をつくと、いつもの様子に戻って話し始めた。
「私ね、可愛げがないの。人にも言われるし自分でもつくづくそう思う。でも引き揚げてきて、母と妹を食べさせるのに必死で働いて働いてね、女学校出ただけの女の子が働いたってねえ。でも夢中だった。妹たちを嫁がせて、母を看取って。気が付いたら自分が歳取ってしまってた。母をどうしても許せなくて、誰にも頼らず生きてきたからこんなになってしまったのよ」
「私なんてダメですね、ふにゃふにゃしてて」
　そう言う私に、いっぱいの笑顔で答えてくれた。
「見てると分かるわよ。甘え上手が幸せよ」
「まるで朝ドラの『とと姉ちゃん』だなあ」
　そう思いながら、毅然としてそれでいてやわらかい雰囲気のその方と、いつも何気ない会話を続けている。
　他の方の何気ない話の中でも痛感することが多くある。戦後７０年以上が過ぎても、ここではリアルな話が生き続けているのだ。

　後半のそれぞれのリハビリが終わると昼食だが、私は午前中だけなのでそのまま帰宅する。
「また来週ね」
　友人に手を振って、スタッフに見送られドアを開ける。体を動かした心地よさで足も軽い。落ち葉をしゃくしゃくと踏みながら、帰り道を急いだ。
　私もすでに高齢者だ。下り坂だなあと痛感するけれど、ここでいろんな方と週に半日過ごして教えられることがたくさんある。一人一人の人生を凝縮して老いがあり、それぞれ個性豊かに老いている。私も心静かに、でも希望を持って老いの足音に耳を澄ませたい。